

令和5年度 **国語** (50分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけない。
- 2 この問題冊子は29ページである。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始の合図前に、監督者の指示に従って、解答用紙の該当欄に以下の内容をそれぞれ正しく記入し、マークすること。
 - ・①氏名欄
氏名を記入すること。
 - ・②受験番号、③生年月日、④受験地欄
受験番号、生年月日を記入し、さらにマーク欄に受験番号(数字)、生年月日(年号・数字)、受験地をマークすること。
- 4 受験番号、生年月日、受験地が正しくマークされていない場合は、採点できないことがある。
- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークすること。例えば、

10

と表示のある解答番号に対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の②にマークすること。

(例)

解答 番号	解 答 欄				
10	①	②	③	④	⑤

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってよい。

国語

解答番号

1

22

1

次の問1～問5に答えよ。

問1

(ア)、(イ)の傍線部の漢字の正しい読みを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は 1・2。

(ア)

哀愁を帯びたピアノの調べ。

1

- ① あいしゅう
- ② あいう
- ③ ちゅうしゅう
- ④ ちゅうう
- ⑤ あいしん

(イ)

雲が幾重も山にかかっている。

2

- ① いくおも
- ② きちよう
- ③ きじゅう
- ④ きえ
- ⑤ いくえ

問2 傍線部に当たる漢字と同じ漢字を用いるものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 3。

衝動に|かられる。

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ ク|ドクを積んだ僧侶の話|を聞く。

④ 祖先をク|ヨウする。

③ ハイ|クの季語を学|ぶ。

② 立入り禁止ク|イキを設ける。

① モー|ターをク|ドウさせる。

問3 次の月の異名の組合せとして適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 4。

二月・九月・十一月

- ⑤ 睦月・長月・神無月

④ 弥生・葉月・師走

③ 如月・葉月・神無月

② 如月・長月・霜月

① 睦月・長月・霜月

問 4

空欄

に入る語として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

5

。

彼にしてみたら

緊張していたことだろう。

①

たとえ

②

あたかも

③

決して

④

さぞかし

⑤

まるで

問 5

傍線部A～Eの敬語の使い方が適当でないものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6

。

本日は当館に御来場いただき、誠にありがとうございます。御来場の皆様に、お願いいたします。客席内への飲み物の持ち込みは御遠慮ください。倒れてもこぼれないフタ付きの飲み物は御利用いただけます。花束などをお持ちのお客様は、ロビーでお待ちしております。その他の御質問は当館スタッフまで伺ってください。

①

A

②

B

③

C

④

D

⑤

E

2

北高校の購買協力委員会では、委員会担当の増田先生から依頼され、来年度の購買部(学校で学用品などを販売する所)で販売する品目について、生徒からの要望をとりまとめることになった。次に挙げる【話し合いの一部】は、一月、二月に開かれた購買協力委員会で、委員の生徒が、購買部で取り扱う来年度の販売品目について話し合った時のものである。【Ⅰ】～【Ⅵ】はその時の委員会の資料である。【Ⅰ】～【Ⅲ】は購買協力委員会の生徒がまとめたものであり、【Ⅳ】～【Ⅵ】は増田先生から提供されたものである。これらを読んで、問1、問2に答えよ。

一月の購買協力委員会での【話し合いの一部】(発言者の下の数字は発言回数を示す。)

山中さん① 「資料によると、生徒が購買部で扱ってほしいと思っている品目は、文具、おにぎり、パン、デザート、飲み物ということですよ。」
 吉田さん① 「ちょっと確認します……そうですね。それでいいと思います。」
 青木さん① 「私もそれでいいと思います。結局は、現在の購買部で扱っている品目ということですね。」
 山中さん② 「そうですね。では、今日の委員会の報告として、生徒が来年度の購買部で扱ってほしいと思っている品目は、現在の購買部で扱っている品目と同じだということを、担当の増田先生に伝えます。」

二月の購買協力委員会での【話し合いの一部】(発言者の下の数字は発言回数を示す。)

山中さん③ 「今日の委員会では、来年度の購買部で扱う販売品目のうち、パンとおにぎりについて、具体的に何を売ってほしいか、生徒のアンケートをもとに検討します。例年通り、販売するパンは八種類、おにぎりは六種類だそうです。今日の委員会で結論が出ない場合は、来月の委員会で引き続き話し合うことになります。みなさんよろしくお願いします。では、パンとおにぎりについて何を売るかですが、意見がある人はいますか？ ……はい。池田さん、どうぞ。」
 池田さん① 「パンとおにぎりについて何を売るかは、この資料を見て、希望の多い順に決めてしまっているのではないかと思います。希望が多いということは、その商品を買う生徒が多いということだと思えます。」
 山中さん④ 「池田さんから発言がありました。他に意見がある人はいますか？ ……いないようなので、では、池田さんの発言にあったように、今、池田さんが示してくれた資料を見て、希望の多い順に決めるとどうなるかを、確認してみましょう。……読み上げます。お

にぎりでは、鮭^{さけ}、ツナ、昆布、たらこ、おかか、明太子^{めんだいこ}です。パンでは、一番多かったのが卵サンドとカレーパン、次が、焼きそばパンとチーズピザ。あとは順に、ツナサンド、アンパン、シーフードピザ、コロッケパンです。何か意見がある人はいますか？」

川俣さん①

「パンの八種類について、意見があります。今、池田さんや山中さんが元にした資料を見ると、卵サンド、カレーパン、焼きそばパン、チーズピザ、ツナサンド、シーフードピザ、コロッケパンの七種類が総菜系のパンで、アンパンだけが甘いパンとなっています。だから、扱うパンが総菜系に偏っていると思います。私は、甘いパンに対するニーズはあると思うので、資料の通りに機械的に選ぶのではなく、甘いパンをもう少し入れる方向で考える方がいいと思います。」

山中さん⑤

「パンについて意見が出ましたが、他に何か意見がある人は……はい。青木さん、どうぞ。」

青木さん②

「質問をしていいですか？ 川俣さんは、どうして甘いパンに対するニーズがあると思うのですか？」

川俣さん②

「今年度の購買部で扱っているパンは、たしか、総菜系のパンが四種類、甘いパンが四種類ですが、甘いパンの方がいつも先に売り切れているのを見ています。」

青木さん③

「あ、それはたしかに、そうかもしれないなあ。」

吉田さん②

「私も川俣さんの意見に賛成です。今年度の購買部ではアンパンが真っ先に売り切れてしまうというイメージが私にもあります。それに、資料^Cを見ると、今年度はアンパンが卵サンドやカレーパンと同じくらい売れているし、チョコレートパンやクリームパンはチーズピザより売れています。だから、パンについて何を売るかは、資料の通りに機械的に決めるのではなく、川俣さんが言うように、もう少し検討してもいいように思います。」

山中さん⑥

「パンについて意見が出てきていますが、他にどうですか？」

青木さん④

「提案なのですが、おにぎりについては意見が出ないようなので、今日の委員会ではおにぎりの種類を決めるところまでとして、パンの種類については、次回の委員会でもう一度検討してはどうでしょうか？」

山中さん⑦

「今の青木さんからの提案について、どうですか？ ……みなさん、同意してくれているようなので、それでは、今日の委員会の報告として、来年度購買部で扱ってほしいおにぎりの六種類を増田先生に伝えます。パンについては、次回の委員会で改めて検討することにししましょう。」

今年度の北高購買部でのパンの売り上げ個数
(4月～12月まで)

	カレーパン	卵サンド	チーズピザ	焼きそばパン	アンパン	クリームパン	チョコレートパン	ドーナツパン
4月～7月	1525	1525	1454	1500	1525	1440	1518	1300
9月～12月	1850	1850	1669	1842	1845	1794	1815	1746
合計	3375	3375	3123	3342	3370	3234	3333	3046

Ⅳ

購買部で売ってほしいもの

※「引き続き売ってほしいもの」でも「新たに売ってほしいもの」でもどちらも可

- ・ノート
- ・ボールペン
- ・ボールペンの替え芯
- ・シャープペン
- ・シャープペンの芯
- ・マーカー
- ・消しゴム
- ・修正テープ
- ・おにぎり
- ・パン
- ・サンドイッチ
- ・飲み物
- ・プリン

調査対象は北高生

Ⅰ

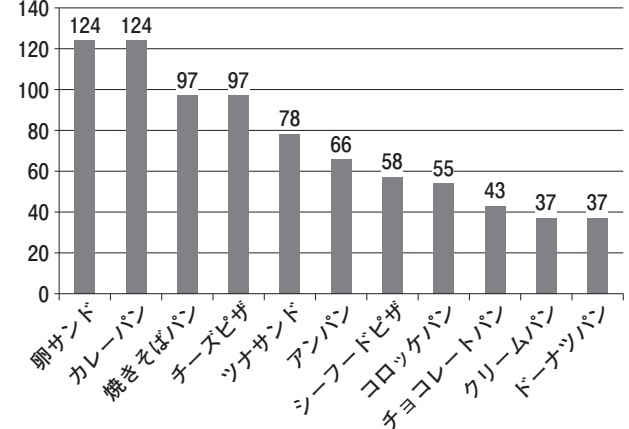
今年度の北高購買部でのおにぎりの売り上げ個数
(4月～12月まで)

	鮭	ツナ	たらこ	昆布	明太子	高菜
4月～7月	1830	1824	1789	1795	1744	1691
9月～12月	2205	2207	2179	2165	2147	2070
合計	4035	4031	3968	3960	3891	3761

Ⅴ

購買部で売ってほしいパン(上位11種類)

※「引き続き売ってほしいもの」でも「新たに売ってほしいもの」でもどちらも可



調査対象は北高生

Ⅱ

今年度、北高購買部で扱っている品目

・文具

ノート・ルーズリーフ・手帳・ボールペン・ボールペンの替え芯・鉛筆・シャープペン・シャープペンの芯・マーカー・消しゴム・修正テープ

・飲食物

パン (カレーパン・卵サンド・チーズピザ・焼きそばパン・アンパン・クリームパン・チョコレートパン・ドーナツパン)

おにぎり (鮭・ツナ・たらこ・明太子・高菜・昆布)

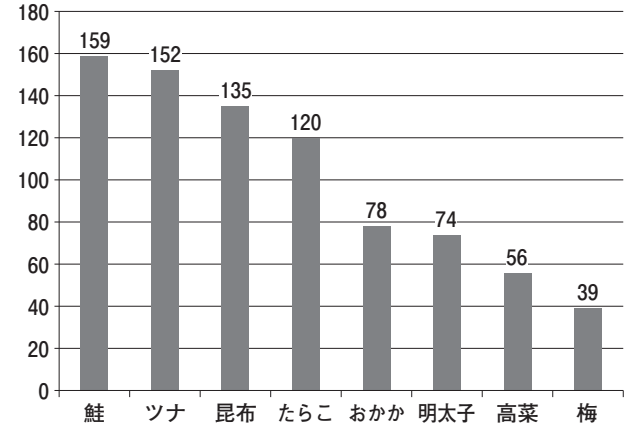
飲み物

デザート (プリン・ゼリー)

Ⅵ

購買部で売ってほしいおにぎり(上位8種類)

※「引き続き売ってほしいもの」でも「新たに売ってほしいもの」でもどちらも可



調査対象は北高生

Ⅲ

問1 傍線部A 資料、傍線部B 資料、傍線部C 資料は、それぞれ【I】～【V】のどれを指していると考えられるか。その組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 傍線部Aの資料は【I】、傍線部Bの資料は【II】、傍線部Cの資料は【IV】。
- ② 傍線部Aの資料は【I】、傍線部Bの資料は【III】、傍線部Cの資料は【V】。
- ③ 傍線部Aの資料は【I】、傍線部Bの資料は【II】と【III】、傍線部Cの資料は【IV】。
- ④ 傍線部Aの資料は【I】と【V】、傍線部Bの資料は【IV】と【V】、傍線部Cの資料は【VI】。
- ⑤ 傍線部Aの資料は【V】、傍線部Bの資料は【II】と【III】、傍線部Cの資料は【IV】。

問2 それぞれの発言について説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 吉田さん①と青木さん①の発言は、山中さん①の発言についてあくまでも部分的に同意したものとなっている。
- ② 山中さん②と山中さん⑦の発言は、話し合ったことをまとめ、次回の委員会の日時を予告するものとなっている。
- ③ 池田さん①と川俣さん①の発言は、取り上げた資料には同じものもあるが、理由付けが異なり、別の意見となっている。
- ④ 山中さん⑤と青木さん④の発言は、論点を絞り、検討の仕方を具体的に提案するものとなっている。
- ⑤ 川俣さん②と吉田さん②の発言は、理由については、言及していないものの、自分の主張を述べたものとなっている。

3

西高校では、国語の時間に「西高校で取り組んでみたいSDGs」というタイトルで意見文を書き、それを相互評価することになった。次にあげる【意見文】は、この学習で池沢さんが書いたものである。また、【和久井さんのコメント】、【滝さんのコメント】は、池沢さんの【意見文】を読んで、和久井さんと滝さんが書いたものである。これらを読んで、問1、問2に答えよ。

【意見文】（意見文中の※は、設問の都合で付したものである。）

西高校で取り組んでみたいSDGs

1年5組 池沢知秋

「西高校で取り組んでみたいSDGs」として私が考えるのは、身の回りの不要な物品を回収することだ。具体的には、「私たちが実際に取り組めそうなこと」という観点から、古着等の回収と、ペットボトルの蓋や家にある不要な食品の回収を考えている。

まず、古着等の回収についてだが、回収するものは、古着、靴、かばん、未使用のバスタオルやタオル等とする。そして、回収は来月の学校祭の時とする。というのも、^Aたとえば、中学校時代のジャージや制服等のような古着、ランドセルやリュック等のようなかばん、中学校時代の体育館シューズ等のような靴を全部まとめて持ってこようとすると、かなりの量になってしまうことが想定されるからだ。もし、それらをまとめた結果が一人で持ちきれない分量になってしまった場合、学校に持ってくることで自体をやめてしまうかもしれない。せっかく回収に協力したい気持ちがあるのに、運ぶ手段がないことで結果的に回収への協力を断念してしまうような事態は避けたい。だから、回収時期は学校祭の時にして、^B学校祭で来校する保護者に回収品の運搬を協力してもらえば、登校の際に自分一人で持ちきれない分量であっても運ぶことができるため、回収量も多くなると考える。ちなみに去年、妹の中学校の学校祭では、各家庭からの不用品を持ち寄って販売する「バザー」が行われた。^C「バザー」があったせいか、妹の中学校では、去年の学校祭の来校者数は、例年よりも多かったようだ。だから、西高校の学校祭で各家庭に協力を依頼して古着等の回収を行えば、学校祭での来校者数はきっと増えると思う。

次にペットボトルの蓋の回収についてだ。これについては毎月1度回収日を設けたい。学校に水筒を持参する人が増えてきているとはいえ、やはりペットボトル飲料は私たちにとって身近なものである。^D昨年度、生徒会が途上国の人達にワクチンを贈るため、西高校内でペットボトルの蓋の回収を呼びかけた時には、大量の蓋が集まった。だから、校内で毎月1度ペットボトルの蓋の回収が始まれば、回収に協力してくれる人は、少なからずいるだろう。

食品の回収についても同様に、毎月1度回収日を設けたい。^E回収日をきっかけにして、家に不要な食品がないかを毎月点検することは、各家庭における食品ロスの削減にもつながると考える。ペットボトルの蓋と不要な食品の回収は同じ日に行うこととし、ボランティア部に協力を依頼してはどうかと考えている。

※ 西高校ボランティア部は、市内の保育園児との交流活動にも取り組んでいるようだ。また、市の児童館で絵本の読み聞かせ活動のボランティアを行っているようだ。

古着等やペットボトルの蓋の回収を通して、途上国の子どもにワクチンを贈ることができる。また、家にある不要な食品の回収を通して、食品ロスを削減していくこともできる。古着、ペットボトルの蓋、不要な食品といった「身の回りの物品」の回収を通して、私たちは「遠くの世界の誰か」のことを考えるようになるだろう。「遠くの世界の誰か」のことを考えることは、私たちの視野を広げ、物事を他人事では終わらせない価値観を育むことにつながる。ささやかではあるが、これが、私たちが西高校でできるSDGsなのだと考える。

【和久井さんのコメント】

西高校で取り組んでみたいSDGs
に関する池沢さんのアイデアが、それ
ぞれの段落で丁寧に説明されていたの
で、とても分かりやすかったです。

改善点をあげるなら、5個目の形式
段落(※)だと思います。この段落は
ア という理由で、カットしても
よいのではないかと思います。

【滝さんのコメント】

西高校で取り組んでみたいSDGs
のアイデアを初めに大きく示し、その
後で具体的な説明をするという論理の
展開が良かったです。

ですが、イ の部分は、池沢さ
んの考えが飛躍していて、根拠がない
推論になってしまっているので、修正
した方がいいと思います。

問1 【和久井さんのコメント】の ア に入る内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 9。

- ① ペットボトルの蓋を集めるといふ池沢さんの提案にボランティア部が賛同しないといふ内容になっている
- ② 西高校で取り組んでみたいSDGsとして池沢さんが述べている主張に関係していない
- ③ 西高校で取り組んでみたいSDGsとして池沢さんが述べている内容を強調しすぎる
- ④ 池沢さんが、ボランティア部として行っている活動の説明となっている
- ⑤ ペットボトルの蓋を集めるといふ池沢さんの提案を打ち消してしまう内容である

問2

【滝さんのコメント】の

イ

に入る内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

10

。

- ① 下線部 A
② 下線部 B
③ 下線部 C
④ 下線部 D
⑤ 下線部 E

4

次の文章を読んで、問1～問6に答えよ。

近世文人の条件は、漢文を自在に操る能力と漢学・儒学の教養である。医学(そのほとんどが漢方医学)はもちろん、当時の学問はおおむね漢籍に依存していたから、漢学は文人の基礎教養であった。蘭学^{らんがく}でさえまずは漢学を学び、洋書も漢訳で読んだ。加えて、知的思考の枠組みは東アジア全域をおおっていた朱子学^(注1)であった。日本では、古代・中世には仏教が思想基盤を提供していたが、近世権力は仏教を政治統制下におき、自由な活動を制限した。そのため儒学が、仏教にとって代わって、思考の枠組みを提供したのである。

朱子学は壮大にして精緻な理論を持つ思想であった。小は日々の行動規範から、大は宇宙の運動法則にいたるまで、一貫した原理でこの世界を説明する知的装置である。いつの時代でも人は、自らが生きることの意味や拠^より所を求めるものだが、江戸時代では儒学、とりわけ朱子学がそれに応える学であった。

戦乱を克服して実現した泰平の時代、人びとは、宗教ではなく、東アジア全域をおおった「普遍的」な学問にもとづいて、知的な活動をおこなうようになっていた。文字社会となり、文字を学ぶことが日常化するなか、知的な学びと教養が求められる時代となった。それは政治的特権層だけの話ではなく、村落の指導層にいたるまで、ある種の文化資本として求められた教養であった。その教養を身につけることは、社会的地位を維持するために必要な条件であった。

江戸時代に、たんに「学問」といえば儒学のことをさす。儒学はそれほど学問の正統の位置にあった。ゆえに、学問に進むためには漢文リテラシーを身につけることを必要とした。知識人は学問に関することはすべて漢文で書いた。それはベダンチックな趣味^(注2)によるものではなく、漢文でなければ表現できない知の世界があったことを意味している。とすれば、江戸の知識人は「漢文で考えた」にちがいない。その意味で、漢文はまた「思考の言語」でもあった。

漢文はほんらい外国語である。しかし日本では、上述した和刻本のように、返り点・送り仮名を付して読む訓読法が常用された。訓読は、日本語の文法に即した独自の言語で、しかも書記言語である。この方法を用いて「漢文で考える」ことが、いかにして可能だったのか。

それを可能にした学習法が、序章^(注4)でもふれた素読(句読)である。再言すれば、素読は儒学学習の第一段階。六―七歳のころから、『孝経』や四書などの経書を声に出して繰り返し読み、テキストの全文を完全に暗誦^{あんじゆ}してしまう学習である。この段階では本文の意味理解はとくに求めない。大判の印刷本を挟んで、差し向かいに坐^{すわ}った師匠から、個別に読み(訓読)を教わる。師匠が声で読む一字一句を子どもがおうむ返しに復誦する。退出後、師のリードなしで読めるようになるまで、めいめい声に出して復誦する。その完全な暗誦が確認されて、はじめて次に進むことができる。

(注6) ちなみに貝原益軒は、一日一〇〇字ずつ一〇〇回復誦すれば、四書の素読は、総計五万二八〇〇文字だから五二八日、一年半ほどでだれでも終えられるという。四書の素読が済めばいかなる漢文も自在に読める、そう益軒はいう。(注7) 徂徠もほぼ同じことをいつているから、益軒の言は誇張ではなかったであろう。近世に共有された考え方であったと思われる。

素読は、意味理解さえ要しない機械的暗誦を強いる学習である。子どもの発達を無視した乱暴きわまりない学習法の強要に見え、いまの学校では考えにくい。しかし、江戸時代に素読無用論があつたとは、寡聞にして知らない。学問に素読は避けて通れないものと意識され、むしろ素読により、漢文読解だけでなく、漢詩や漢文の述作も自在に可能となるのだ、といった共通理解があつたと思われる。

素読はテキストを音読する。しかし近代読書の音読・黙読とは異なつた次元にある。素読する経書は、聖人の言葉が埋まつた特別なテキストであり、意思疎通のための道具としての言葉とは位相がちがう。テキストのある一節が示されると、続くフレーズが流れるように口を衝いて出てくる。それはつまり、テキストが丸ごと身体に埋め込まれているということにひとしい。私のいう「テキストの身体化」である。深い思想を内包した経書の言葉は、真理に満ちた聖人の言葉。それを、自らに一体化し、自分の思考と活動に活用することができる。それが素読の効用であり、近世に素読無用論がなかつた理由はそこにある。

(注8) 先に、手習塾での文字学習は、「読み」より「書く」ことから入つた、と指摘した。ところが、学問の場合は素読から入る。素読は読書とは異なつた次元のいとなみであると、先に述べたが、声に出すのは、「読み」というより、暗記のための(その意味では、身体化するための)方法だと考えてよい。ここに、文字の学びと学問の学びの、位相のちがいが認められる。

C 素読された経書の言葉は、日本語化された訓読体漢文であつた。しかしそれは、日本語にはちがいないものの、日常使われる口語体の日本語ではない。また文語的書記言語とも同じではない。あえていえば王朝雅語に近い独特の文体で、素読訓読の文体としかいえないようがない。

こうした文体がなぜ選ばれたのか。前田愛は、素読は、文のリズムと抑揚、音の響きが、幼い身体に刻印され、独特の漢語の形式が、日常の言葉とは異なつた次元の「精神のことば」や、ある種の「思考の形式」をつくっている、という(『近代読者の成立』)。(注10) また中村真一郎も頼山陽『日本外史』の漢文について、暗誦に適した、「人間の呼吸に自然に合致した、見事な雄弁調として成功している」と書いている(『頼山陽とその時代』)。山陽の漢詩は、幕末以後に流行をみた詩吟に好んで選ばれた。力強いリズムと響きをともなう訓読体漢文であつたからこそ、朗々と謳いあげるのにふさわしかったのであろう。この詩吟の行為が、幕末に志を同じくする尊王攘夷派の志士たちの感情を揺さぶり、共鳴と高揚を惹き起こし、政治活動へのパッションにつながつた。

こう考えれば、訓読体漢文は暗誦しやすいように工夫が凝らされ、身体化に適した言語としてつくられたのではないだろうか。素読に適した文体が

訓読体漢文であった、ここではそう想定しておきたい。

素読は子ども期になされる。^Dその後の儒学の学びは、「講義」「会業」^{かいぎよう}「独看」^{どくかん}へと進んでいく。それに詩文実作を加えてもよい。

「講義」とは、講師が一方的に口頭で教える、今のいわゆるレクチャーのことではない。素読で身体化した経書の「義」(意味)を、師匠が一定の注釈にもとづいて解釈を授ける教授のこと。これにも、師匠がひとりひとりの学生と差し向かいでおこなう「講授」と、大勢の学生を前に経書を解釈する「講釈」との別がある。講授は師が短時間で個別指導をし、学生は自宅で復習を繰り返す。その方法形態は、素読のときとあまり変わらない。一方、講釈はおおむね一斉教授の形をとる。まずは個別指導／個別学習の講授が日々になされていたのに対し、一斉教授の講釈の方は塾主(藩校なら学長的存在の儒者)によって時折なされるものだった。すなわち講釈は特定の節目(たとえば新年の講書始や藩主の臨校、孔子を祀る釈祭など)に際して、経書の一節を、全員を前にして解釈してみせる。この意味での講釈は、多分に儀礼や儀式に類する性格のもので、そのぶん、権威的であった。

「会業」は、同レベルの学生たちがグループでおこなう共同学習である。会業にも会読と輪講の別があった。いずれも輪番の当番が発表し、その後、質疑し討論する。通常はチューター役の先輩が同席して学習の流れを差配する。両者のちがいは用いるテキストにある。会読のテキストは経書ではなく、史書(中国の正史)、子(諸子百家)^(注13)、集(詩文集)の類。それらは読めさえすれば、意味もほぼ理解できる。先行の注釈や解釈を必要としないから、読むこと自体を目的としていて、いまの読書会と大きくはちがわない(以上、武田勘治『近世日本学習方法の研究』)。

いっぽう、輪講のテキストは経書である。輪番で経書を「講義」する。経書は根柢となる原典、いわば聖なる古典であるから、先人たちの注釈書の山に分け入って、異端と正統とを弁別しながら「正しく」解釈していかなければならない。朱子学の場合であれば、「四書集註」^(注14)も経書と同列に位置付けられていたから、これも輪講のテキストとなる。哲学の原典を解釈する共同作業というに近い。いまでいうゼミナールに相当するだろう。

以上、儒学の一般的な学習法を説明してきたが、どの儒者も学習法が同じというわけではない。(知のつくられかた)が、思想の在り方(学派)によって異なっているからである。逆に言えば、思想の在り方が学び方を規定する。学びと思想の間の深い関係は、本書の主要なテーマである。

漢文は知的言語、思考言語であると述べた。そもそも思考は言語によってなされるから、思考活動は言語活動の一種にほかならない。とすれば、どの言語で考えるか、それは思考する知の内容や形式と不可分に関わってくる。たとえばSNSで使う言葉と学校教科書の文字言語は、同じ日本語であったとしても、その思考の質と内容は大きく異なってくるだろう。笑いを強要するテレビの娯楽番組の口語によって、学校の授業の内容を正確に伝えることはむずかしい。「伝える知」と「伝えるメディア」とは不可分に関わる。いかなる言葉で考えるのか、それはその思考の質や内容と切り離して考えることはできない。

江戸時代、人の生き方やその意味を考える主要な知は儒学であり、儒学が、江戸の〈知のつくられかた〉を規定した。出版メディアの確立と手習塾・

学問塾の普及によって、条件さえ許せばだれもが儒学を学ぶことができるようになった。そこに、学びへの意志や主体がうまれる契機があった。^E 知を求める人びとの裾野の広がりが、科擧のない近世日本の儒学と儒者の存在を支えていたのである。

（辻本雅史『江戸の学びと思想家たち』による。）

（注1） 朱子学——中国、宋の時代に朱熹^{しゆき}が大成した儒学の学説。

（注2） ペダンチック——学問や教養をひけらかすさま。

（注3） 上述した和刻本——和刻本は日本で出版された漢籍。筆者は和刻本に関し、舶来の本とちがって訓点を付すことができたと言っている。

（注4） 序章でもふれた——序章で筆者は、素読について「六歳前後から始める儒学の基礎学習のことである」と述べている。

（注5） 『孝経』や四書などの経書——儒教の最も基本的な教えをしるした書物。

（注6） 貝原益軒——江戸前期の儒学者。

（注7） 徂徠——^{おきゅう}荻生徂徠。江戸中期の儒学者。

（注8） 先に、手習塾での文字学習は、——本文に先立つ部分で筆者は、儒学の学問塾は素読から入るが、庶民が通う手習塾は読み書き、とりわけ書くことから学び始めることに言及している。

（注9） 前田愛——文芸評論家、国文学者。一九三一～一九八七。

（注10） 中村真一郎——小説家、文芸評論家、詩人。一九一八～一九九七。

（注11） 頼山陽——江戸後期の儒学者、史家。

（注12） チューター——研修会、講習会などの講師。

（注13） 諸子百家——中国春秋時代末期から戦国時代にかけて現れた諸学者及びその学派の総称。ここではそうした人びとによって書かれた書物。

（注14） 四書集註——四書に関する注釈の書。

問1 傍線部A 漢文はまた「思考の言語」でもあった とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号

は 11。

- ① 近世文人にとって漢文は、自らが学問を身につけるための手段であるだけでなく、教養人としての自分の思考の深さを周囲に示す道具ともなっていたということ。
- ② 江戸時代において漢文は、たんに学問的な読み書きに必要な道具とされていたというだけでなく、思考そのものを支える不可欠な言語でもあったということ。
- ③ 漢文は、返り点や送り仮名を付すことで日本語の文法に即した文を作れるだけでなく、中国語を理解し思考を深めることができるものでもあったということ。
- ④ 論理的な文法体系をもつ漢文の特長により、当時の社会状況を記録するだけでなく、儒学のような哲学的な問題について思考することもできたということ。
- ⑤ 江戸の特権階級にとっての社会的地位の象徴である学問で漢文を用いるだけでなく、日常生活においても漢文を通して思考することが多かったということ。

問2 傍線部B 近代読書の音読・黙読とは異なった次元にある とあるが、このように言えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の

- ① ～ ⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

① 素読は現代の学習でおこなわれる読書とちがいで、意味理解さえ必要としない代わりに、特権階級に必須の王朝雅語を学ぶことができる唯一の方法であったから。

② 素読は近代読書とはちがいで、意味理解さえ必要とせず、文字や文法をおぼえる技術を高めることだけに特化した学習方法として用いられていたから。

③ 素読で使うテキストは聖人の言葉が埋まった特別なものであり、一般的な人は、自らに一体化させ自分の思考と活動に活用することができなかったから。

④ 素読は近代読書とはちがいで、暗誦によって自分の身体をテキストそのものと一体化させ、思考と活動に活用するためにおこなわれるものであったから。

⑤ 素読がおこなわれた江戸時代には、現代ほど子どもの成長に応じた教育方法が発達していなかったため、機械的暗誦を進める学習方法しかなかったから。

問3 傍線部C 素読された経書の言葉は、日本語化された訓読体漢文であった とあるが、訓読体漢文が素読に用いられたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

① 平易な言葉が幼い子どもの身体にも刻印されやすかったから。

② 人間の呼吸に自然に合うことで、日常的にも使用しやすかったから。

③ 力強いリズムと響きにより暗誦しやすく、身体化に適していたから。

④ 「思考の形式」をつくるために工夫してつくられた言語であったから。

⑤ 聖人の言葉が、「精神のことば」を身につけるのに適した内容だったから。

問4 傍線部D その後の儒学の学び について、本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 「講義」を終えると学生は哲学の原典を解釈する共同学習に専念する。
- ② 「講授」は、藩主らが経書の一節を、大勢の学生に一斉に解釈するものである。
- ③ 儒学の学習方法は確立しており、どの手習い所であってもちがいはない。
- ④ 師匠が学生に一对一の差し向かいで教授するのは「素読」までである。
- ⑤ 「会読」と「輪講」とでは、それぞれ用いるテキストにちがいがあある。

問5 傍線部E 知を求める人びとの裾野の広がり とあるが、このような状況になった背景として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 出版メディアの確立、手習塾・学問塾の普及によって、人びとは文字の便利さや知的な学びの必要性を知ることとなり、政治的特権層だけでなく村落の指導層にいたるまで、主体的にこれらの塾へ通うようになったこと。
- ② 出版メディアの確立、手習塾・学問塾の普及によって、学びへの意志や主体性にもとづいて誰もが好きなやり方で儒学を学べるようになったことで、これまでの儒学の学び方が否定され、学問の新たな方法が開けてきたこと。
- ③ 江戸時代、人の生き方やその意味を考える主要な知は儒学が中心となり、仏教はすっかり影を潜めることになったが、仏典の解釈などで文字を学ぶことには一定のニーズがあり、手習塾などがその需要を満たしたこと。
- ④ 文字社会であった江戸時代には、政治的特権層だけでなく一般の人びとまでが文字を学ぶことが日常となったが、これらの人びとに教育を施す必要から近世権力が手習塾や学問塾を普及させていったこと。
- ⑤ 文字を学ぶことが日常化し、知的な学びと教養が人びとに求められるようになった江戸時代に、出版メディアの確立、手習塾・学問塾の普及によって、条件さえ許せば誰もが儒学を学ぶことができるようになったこと。

問6 この文章における論の展開と内容について述べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 16。

- ① 近世の文人にとって必須であった漢文学習の方法としての素読を紹介し、素読がテキストの身体化を目指した学習方法であったと論じた後、その後の儒学の学習方法の説明を通して日本近世の〈知のつくられかた〉について述べている。
- ② 近世の学習方法としての素読を現代の学習方法と比較しつつ論じ、その有用性を説くとともに、訓読体漢文がどのように誕生したのかを述べた後、近世の知が漢文によって支えられていたと論じている。
- ③ 近世の人びとにとって儒学がいかに重要な位置を占めていたのかを述べた後、儒学の学習に欠かせない経書の暗誦方法としての素読を紹介し、素読が現在の学習方法とちがって内容理解を前提としていないことを非難している。
- ④ 江戸期の庶民にとって漢文を学ぶ場であった手習塾における学習方法を総括的に説明し、次に、そこで使われたテキストが聖人の言葉が詰まった聖典であることや、これらが人びとに与えた影響を論じている。
- ⑤ 近世の人びとにとっての漢文リテラシーの重要性を述べ、次に、その学習方法としての素読を紹介することで、当時の学習方法がいかに人びとの儒学学習に寄与していたかをSNSで使う言葉との比較のなかで論じている。

5

次の【文章Ⅰ】は書物を読むことについて、【文章Ⅱ】は学問について述べた文である。これらを読んで、問1～問4に答えよ。

【文章Ⅰ】

凡て件すべの書くだりども、かならずしも次第（注1）を定めてよむにも及ばず。ただ便（注2）にまかせて、次第にかかはらず、これをもかれをも見るべし。

又、いづれの書をよむとても、初心（注3）のほどは、かたはしより文義を解せんとはすべからず。まづ大抵にさらさらと見て、他の書にうつり、これやかれやと読みては、又さきによみたる書へ立ちかへりつつ、幾遍（注4）もよむうちには、始（注5）に聞えざりし事もそろそろと聞ゆるやうになりゆくものなり。

さて、件の書どもを数遍よむ間には、其外（注6）のよむべき書どものことも学びやうの法なども、段々に自分の料簡（注7）の出来るものなれば、其末の事は一々さとし教ふるに及ばず。心にまかせて力の及ばむかぎり、古きをも後の書をも広くも見るべく、又簡約（注8）にしてさのみ広くはわたらずしても有りぬべし。

（『うひ山ぶみ』による。）

(注1) 件――それら。
(注2) 次第――順序。
(注3) 便――便宜。

【文章Ⅱ】

種^ウ樹^ル者^ハ必^ズ培^ヒ其^ソ根^ニ、種^ウ德^ル者^ハ必^ズ養^フ其^ノ心^ヲ。欲^セ樹^ノ之^ズ長^ヲ、必^ズ於^テ始^ニ生^ル時^ニ、刪^ケ其^ノ繁^ニ枝^ヲ。欲^セ

德^ノ之^ズ盛^{ナル}、必^ズ於^ニ始^イ学^テ時^ニ、去^レ夫^カ外^ヲ好^ム。如^モ外^ニ好^マ詩^ヲ文^ヲ、則^ス精^ス神^ニ日^ニ漸^{ヤウヤク}漏^{ロウ}泄^{セツ}、在^リ詩^ニ文^ニ

上^ニ去^{ユカン}。凡^ノ百^ノ外^ノ好^ノ皆^シ然^ニ。又^イ曰^{ハク}、我^ノ此^{ココニ}論^{ズル}学^ヲ、是^{コレ}無^ニ中^{ズル}生^ヲ有^ノ的^ノ工^{ナリ}夫^ヲ。諸^{シヨ}公^ノ須^{カナ}要^{ラズ}信^ジ及^{ンデ}

只^タ是^レ立^テ志^ヲ。学^ヲ者^ハ一^ニ念^{ナサン}為^{コトヲ}、善^ヨ之^{コレ}志^{サバ}、如^{ゴトク}樹^{セヨ}之^ヲ種^{ウルガ}、但^{ナク}勿^{クル}助^{コト}、勿^ク忘^{ルル}、只^{ヒタ}管^{スラ}培^{バイ}植^{シヨク}、将^{シテ}

去^カ、自^ニ然^ニ日^ニ夜^ニ滋^シ長^シ、生^ニ氣^ニ日^ニ完^{マツタク}。日^ニ茂^{ラン}樹^ノ初^ノ生^ノ時^ニ、便^{スナハチ}抽^メ。亦^{マタ}須^{カナラズ}刊^{シテ}落^{シテ}、

然^ル後^ニ能^{ヨク}大^{ナリ}初^ノ学^ノ時^モ亦^リ然^ニ。故^ニ立^{ツル}志^ハ貴^ブ專^ニ一^ヲ。

(『伝習録』による。)

- (注4) 培——養い育てる。
- (注5) 種徳——人格を育成する。
- (注6) 始生時——成長するはじめのとき。
- (注7) 刪其繁枝——多くなった枝を取り除く。
- (注8) 外好——外部への興味。
- (注9) 漸——次第に。
- (注10) 漏泄——もれる。
- (注11) 在詩文上去——詩の方に移ってしまうだろう。
- (注12) 凡百——あらゆる。
- (注13) 諸公——君たち。
- (注14) 須要——必ず。
- (注15) 学者——学問をする人。
- (注16) 滋長——成長。
- (注17) 完——充実する。
- (注18) 抽——伸びてきたら。
- (注19) 刊落——切り落として。
- (注20) 專一——他のことを考えずにただ一つのこと心に心を注ぐこと。

問1 傍線部A 初心のほどは、かたはしより文義を解せんとはすべからず とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 17。

- ① 書物を読むときは、個々の語句の解釈にはこだわらずに大まかに見て、他の書物にうつりあれやこれやと読み、さらに前に読んだものにかえっていくということを繰り返していくうちに、最初に理解できなかったことも徐々にわかるようになるから。
- ② 書物を読むときは、最初から一つ一つの語句をおろそかにせずじつくりと読み、他の書物にも同様のことが書いてあるか調べ、さらに前に読んだ書物数編と読み比べをするということを繰り返していくうちに、まもなく理解できるようになるから。
- ③ 書物を読むときは、まず細かな点にはとらわれないように全体の内容を見て、他の書物の何冊かをあれやこれやと読み、また以前読んだ書物から派生して新たな書物を読んでいくうちに、内容を理解するための方法がわかるようになるから。
- ④ 書物を読むときは、個々の語句を丁寧に調べてあらすじをつかんでから、他の書物にうつりあれやこれやと詳しく読み、また前に読んだものにもどっていくということを繰り返していくうちに、大体的な内容が理解できるようになるから。
- ⑤ 書物を読むときは、年配の助言者の指導を仰いで大まかな内容を読解し、その上で他の書物にうつりあれやこれやと読んだり、過去に読んだ書物も読み返したりすることを繰り返していくと、最初の助言の内容がより良く理解できるようになるから。

問2 傍線部B 凡百外好皆然。とあるが、これを説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

① 自分の徳を育てようとする人は、自分の精神性を高めるべきなのに、外部の誘惑にとらわれてのめり込んでしまい、最終的には身体も衰えてしまうということ。

② 自分の徳を育てようとする人は、自分の精神性を高めることを第一と考えるので、外部に興味が生じたものもすべて精神を養うことに役だてようとしてしまうということ。

③ 自分の徳を育てようとする人は、自分の心を育てるために、外部への知的好奇心を心の栄養源として取り込み、豊かな徳を身に付けられるようになるということ。

④ 自分の徳を育てようとする人は、自分の心を育てることに力を入れるべきなのに、外部に興味があるものが生じると、そちらの方に関心がそれてしまうということ。

⑤ 自分の徳を育てようとする人は、自分の心を育てることに専念するあまり、外部の人間の気持ちを考えることができず、徐々に自己中心的になってしまうということ。

問3 空欄 C に入る語の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

①	C	枝葉	D	根幹	E	根幹
②	C	枝葉	D	繁枝	E	根幹
③	C	枝葉	D	繁枝	E	枝葉
④	C	根幹	D	繁枝	E	枝葉
⑤	C	繁枝	D	根幹	E	枝葉

問4

古文の授業で、【文章Ⅰ】の出典『うひ山ぶみ』を読んだ山川さんは、「凡て件の書ども、かならずしも次第を定めてよむにも及ばず」の一節に興味を持ち、改めて『うひ山ぶみ』が所収されている書籍を調べたところ、注記があることに気付いた。次に挙げる【資料】は、【文章Ⅰ】の中に付けられた注記で、個々の解説や評論が記載されているものである。これに関して、【山川さんと友人たちの会話】を読んで、空欄 X へ Z に入るものとして最も適当なものを、後の各群の ① ～ ⑤ のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は 20 ～ 22 。

【資料】

(ヨ) 初心のほどは、かたはしより文義を云々。

文義の心得がたきところを、はじめより一々に解せんとしては、とどこほりてすすまぬことあれば、聞えぬところは、まづそのままにて過すぞよき。

殊に世に難き事にしたるふしぶしをまづしらんとするは、いといとわろし。ただよく聞えたる所に心をつけて、深く味ふべき也。こはよく聞えたる事也と思ひて、なほざりに見過せば、すべてこまかなる意味もしられず、又おほく心得たがひの有りに、いつまでも其誤りをえさとらざる事有る也。

(タ) 其末の事は一々さとし教ふるに及ばず。

此ところをふと思ひよりてよめる歌、筆のついでに、「とる手火も今はなにせむ夜は明けてほがらほがらと道見えゆくを」。

(レ) 広くも見るべく、又云々。

博識とかいひて、随分ひろく見るもよろしきことなれども、さては緊要の書を見ることのおのづからおろそかになる物なれば、あながちに広きをよきこととのみもすべからず。その同じ力を、緊要の書に用ふるもよろしかるべし。又、これかれにひろく心を分くるは、たがひに相たすくこともあり、又たがひに害となることもあり。これらの子細をよくはからふべき也。

【山川さんと友人たちの会話】

山川さん 「私、『うひ山ぶみ』の『かならずしも次第を定めてよむにも及ばず』を読んで、驚いてしまったの。図書館で『うひ山ぶみ』を探したら、注が付いていたのを発見したよ。【資料】と一緒に見てもらえるかな。」

谷岡さん 「書物を読むのに、『かならずしも次第を定めてよむにも及ばず』って、作者は言っているんだよね。(三)の『文義の心得がたきところを、はじめより一々に解せんとしては』にも『はじめより一々に』って言っているところがあるね。そこに関係があるのかな。」

森田さん 「そもそも『文義の心得がたきところを、はじめより一々に解せん』としたら、どういう問題が生じるのかな。」

山川さん 「熟読すると、滞って先にすすまないことがあるという問題ではないのかな。」

森田さん 「それだけじゃないと思うよ。『文義の心得がたきところ』って、『難き事』でもあるよね。『殊に世に難き事にしたるふしぶしをまづしらんとするは、いといとわろし。ただよく聞えたる所に心をつけて、深く味ふべき也。』ってあるから、X ということもあるのではないかな。」

山川さん 「学ぶ者の心構え、っていうのが『うひ山ぶみ』には書かれているね。」

森田さん 「(夕)には、学ぶ者に対する師の思いが詠み込まれているよ。下の句の『ほがらほがらと道見えゆくを』の『道』って何かな。」

谷岡さん 「一首全体から考えてみようよ。『とる手火も今はなにせむ』は、『手にもつ火もいまでは用はない』って訳せるよね。この『火』って、『道』を照らす『火』だよ。ここは、『一々さとし教ふるに及ばず』ってあるから、『火』は、『さとし教ふる』のたとえかな。」

山川さん 「【文章Ⅰ】では、『段々に自分の料簡の出来るものなれば、其末の事は一々さとし教ふるに及ばず』って言っているのだから、『道』は『自分の料簡』にあたる部分かな。Y だと考えられないかな。」

谷岡さん 「そうだね、僕もそう思うよ。特に、『初心のほどは』ってあるから、初学者に向けた学問をする上での大切な心構えが説かれている、最終的に(夕)の『ほがらほがらと道見えゆくを』になっっていくのかな。」

森田さん 「そういえば、漢文の授業で『伝習録』(【文章Ⅱ】)も読んだよね。『伝習録』にも、『必於始学时、去夫外好』という一文があったな。最後には、『初学时亦然。故立志贵专一。』ってあったから、『伝習録』も初学者に対する学ぶ者の心構えが説かれているね。ここに『うひ山ぶみ』の(レ)と共通点がありそう。」

谷岡さん 「そうだね。その共通点は、Z とまとめることができそうだね。」

X

20

- ① 平易なところを難しく言い換えることができると、間違った解釈が生まれてしまうことになりかねない
- ② 平易なところは理解した気になるけれど、それでは文章を深く読み味わったということにならない
- ③ 平易なところをいい加減にすると微妙な意味が感じ取れず、間違った解釈をしても気付けない
- ④ 平易なところに注意を向けてしまうと、文意を正しく解釈できないし、こまやかな情趣も味わえない
- ⑤ 平易なところと同じように難解なことも理解しないと、全体を正しく読解することにつながらない

Y

21

- ① 学問に書物を用いる時の火の取り扱い
- ② 師の学問と自分の学問の方向性の違い
- ③ 文献を用いた自己流の研究方法の課題
- ④ 学問の方法に対する自分なりの考え方
- ⑤ 学問に必要な書物の一般的な見定め方

Z

22

- ① 学問で一番重要なものを手放したり忘れたりしてはいけない
- ② 視野を広くするためには、労力を一点に集中させる必要がある
- ③ 学問を始めるときは、何事にも全力であることが必要だ
- ④ 初学者の学問の進め方は、何か一方に偏らないことが重要だ
- ⑤ 本来に大切なことに注力するために、余計なことを除外する

